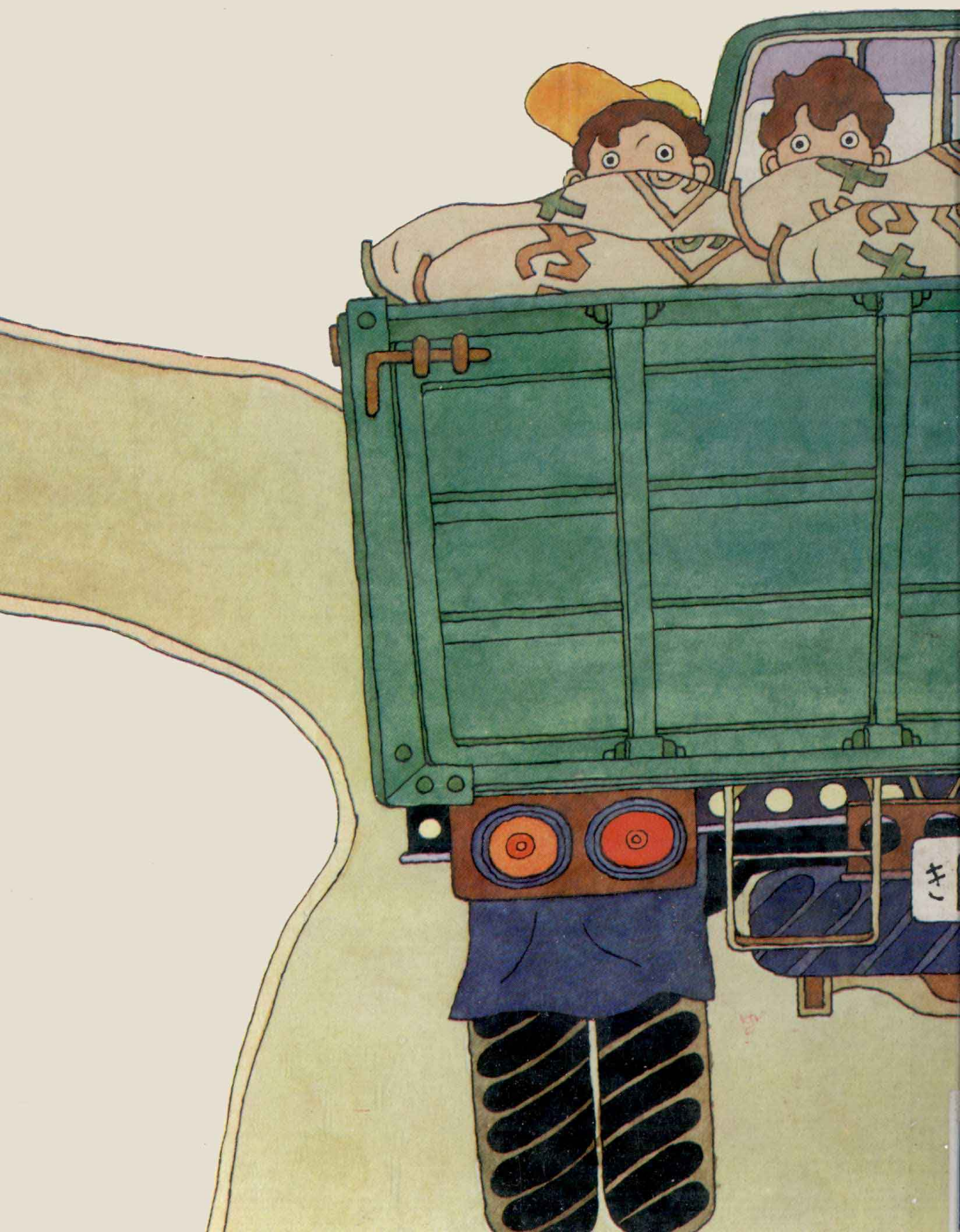


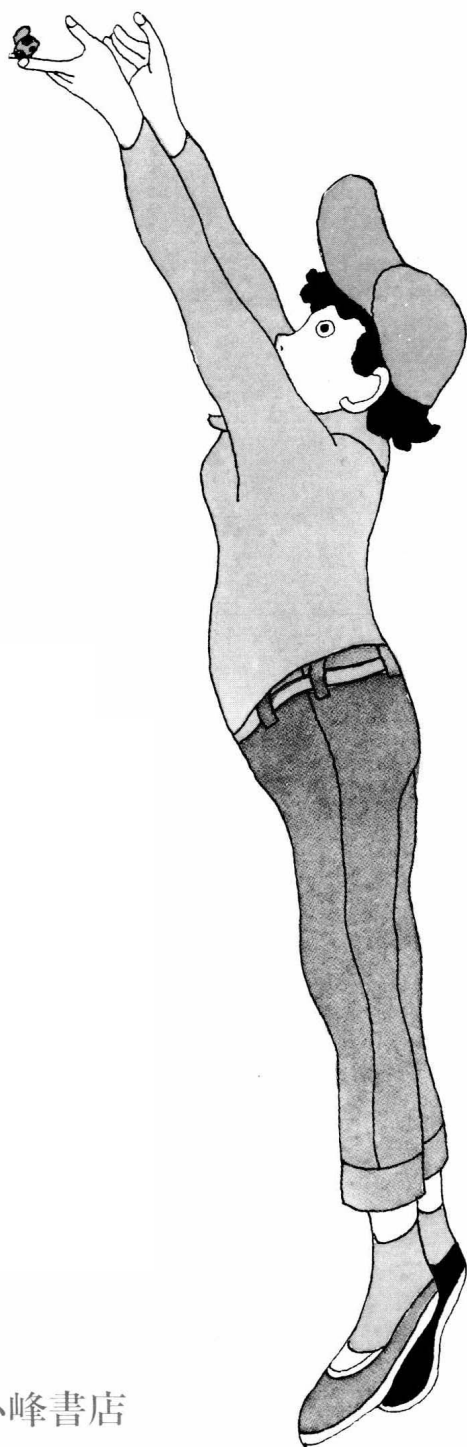
ひばり団地のテントウムシ

大石 真作 斎藤 博之 絵



ひばり団地の テントウムシ

大石真 作 斎藤博之 絵



小峰書店

大石 真

ひばり団地のテントウムシ

小峰書店 1973 (昭48年)

169p 23cm (創作童話 3)

基本カード記載例

創作童話

ひばり団地のテントウムシ

一九七一年一月三〇日 第一刷

一九七三年七月一〇日 第七刷

著者 大石 真 おおいし まこと

発行者 小峰広恵

本文印刷 株式会社 厚徳社

製本 小高製本工業株式会社

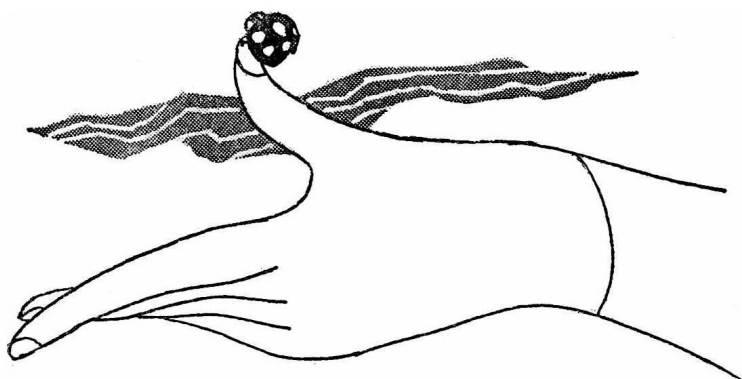
表紙印刷 合資会社 斎藤印刷所

発行所 株式会社 小峰書店

東京都新宿区舟町六十一六〇
振替 東京 一九五五四四
電話代表 (三五七) 三五二一

落丁・乱丁本はお取りかえします

8393-4903-2349



まえがき

テントウムシは、指^{ゆび}のてっぺん
までよじのぼって、もうそれ以上^{いじょう}、
のぼるところがないとわかると、
指^{ゆび}さきから空にむかってとびたっ
ていく。

きみたちも、テントウムシとお
んなじだ。どんなこまったことが
おきても、けっして引^ひきかえした
りはしない。そして、いさましく、
空にむかってとびたっていく……。

もくじ

かえってきたタカシ 6

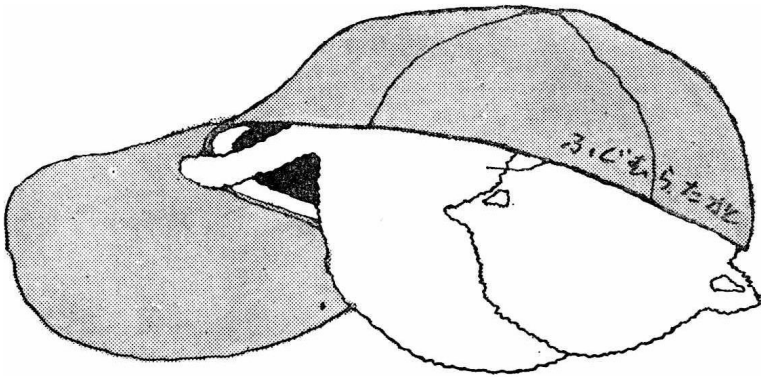
毒^{どく}へびとザリガニ 15

かくれんぼ 25

トラックの上で 34

白い子ネコ 49

黒板^{こくばん}の絵^え 62



夜の電話 でんわ 75

ふたりのお客 きやく 88

すてきな電車 でんしゃ 104

じょう気機関車製作中 ききかんしゃせいさくちゆう 118

団地の討論会 だんちとうろんかい 140

とびたつテントウムシ 157

■ 著者紹介



大石 真 一九二五年埼玉県に生まれる。早稲田大学卒業。『風信器』で第三回児童文学者協会新人賞受賞、『見えなくなったクロ』で第十二回小学館文学賞受賞。おもな作品に『少年のこよみ』『チョコレート戦争』『ささるのじてんしゃ』『ペリカンとうさんのおみやげ』など多数。

現住所 東京都昭島市拝島町三五一九

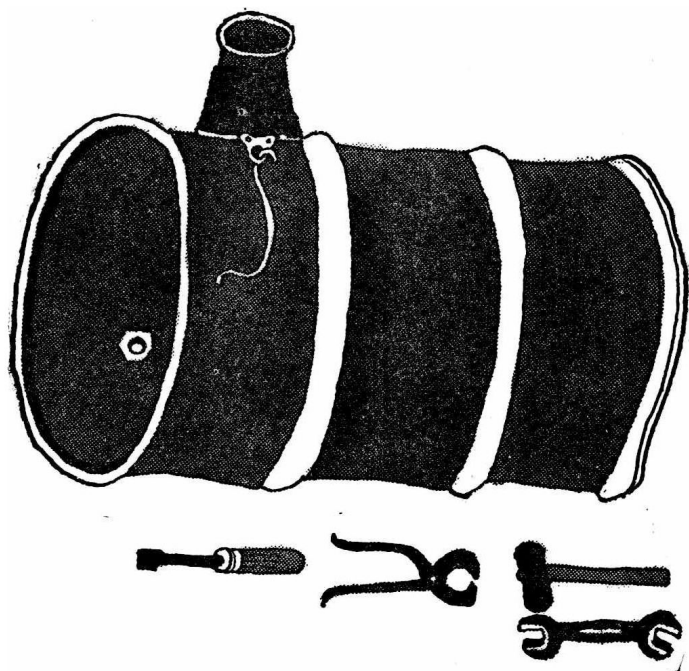
■ 画家紹介



斎藤博之 一九一九年奉天に生まれる。帝国美術学校卒業。以後、精力的に油絵の製作を続け、年一回の個展を開催する一方、児童図書のさしえを多数発表している。最近の作品『ふしぎなつむじ風』『マサルとユミ』『しらぬい』『海賊島探検株式会社』など。

現住所 東京都国分寺市南町二一十一

ひばり^{だんち}団地のテントウムシ



かえつてきたタカシ



タカシは、ものすごいいきおいで、団地の階段をのぼっていきました。

三階までくると、いつも、おなががすいたなあ、とタカシはおもいます。それから、きょうのおやつはなにかな——って。

「まあ、タカシちゃん、大きくなったこと……。」

三階と四階のちゅうで、ひさしぶりに吉村さんのおばあさんにあいました。吉村さんの家は、タカシの家のすぐ下の四階で、おばあさんは夏が近づくと、毎年、このひばり団地のむすこの家にやってくるのです。むすこの家が三げんあるけれど、夏は、いちばんここがすずしいからだそうです。

「こんにちは。」

黄色いぼうしのつばに、ちよつと手をかけて、タカシは、あいさつしました。

吉村さんのおばあさんは、手すりにつかまりながら、太ったからだをよたよたさせて、ゆつくりと階段をおりていきました。

「エレベーターがあると、いいんだけどなあ。」

タカシは、くるしそうな、おばあさんのうしろすがたを見ながら、おもいました。そうしたら、タカシだって、おおだすかりのはずです。でも、タカシたちの団地には、そんなべりりなものはありません。

やっと、五階につきました。五階の八号室がタカシたちの家です。タカシは、じぶんの家のブザーをおしました。

ブザーをおすとき、タカシは、いつもきまって、ほんのちよつぱり、むねがどきどきします。もし、ドアがあいたとき、おかあさんじゃなくて、タカシのしらない、とんでもないおそろしい人が中からあらわれたらどうしよう、とおもうからです。

そんなことをタカシがかんがえるのは、テレビや、マンガで、こわい話を見すぎたため



かもしれない。でも、ドアがあいて、おかあさんの顔を見たたん、そんな心配しんぱいは、たちまち、どこかにふきとんでしまいます。

それでいて、ブザーをおすときになると、いつもきまって、むねがドキドキするのは、ふしぎです。

ところが、その日、タカシがいくらブザーをおしても、おかあさんはあらわれませんでした。

タカシは、鉄てつのドアをこぶしでどんだたいて、「おかあさん、おかあさん。」と、よびました。

すると、おとなりの原はらさんのドアがあいて、おばさんが顔をだしました。

「タカシ君、おかあさんは、ちょっとおつかいにいらっしやったのよ。もうすぐかえってくるはずだけど、それまでおばさんの家でまっくらっしやい。」

やさしい声で、おばさんはいいました。

そのときになって、タカシは、じぶんの家のドアの上のほうに、おかあさんのはり紙がみがはってあるのに気がつききました。

『たかしちゃん、ちょっととるすします。かぎは、おとなりの原はらさんのおばさんのところにあります。』

「さあ、いらっしやい。」

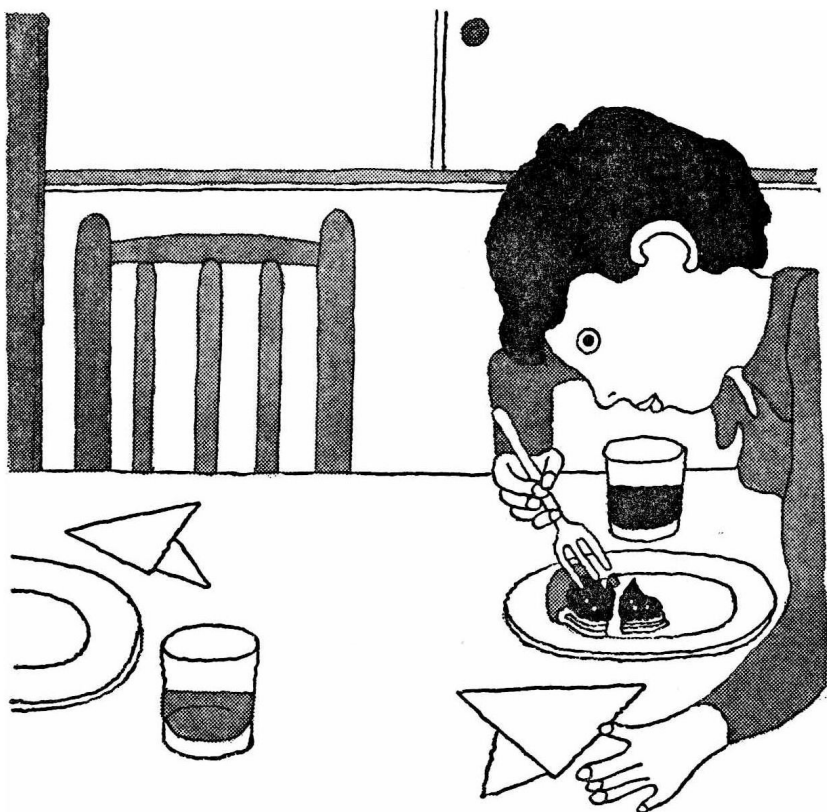
また、おばさんがいいました。

お婆さんのいる五〇七号室は、この春まで、川島さんの家でした。川島さんの家には、タカシとおない年のたまみちゃんがついて、タカシは、よくあそびにいきました。でも、そのあとに原さんがひっこしてきてから、タカシはまだいちども、原さんの家にはいったことがありません。

タカシは、お婆さんのうしろから、はじめて原さんの家にはいりました。団地ですから、タカシの家も、原さんの家も、間取りや、大きさにわりはありません。でも、子どものいない原さんの家は、タカシの家にくらべると、びっくりするくらいきれいでした。たたみも、じゅうたんも、テーブルも、いすも、カーテンも、なにからなにまで新しくめでした。

「おなががすいたでしょう。いま、おやつをもってきますからね。さあ、手をあらってちようだい。」

タカシがいすの上にランドセルをおいて、もどつてくると、テーブルの上には、紅茶とア



ツプル・パイがならんでいました。
「さあ、めしあがれ。」

タカシは、よくひえた紅茶こうちやをのみ、それから、アップル・パイにフォークをつき立てました。でも、口までもっていくまえに、アップル・パイは、ぼろぼろくずれおちてしまいました。

タカシは、フォークをつかうのがにが手なんです。いつだって、うまく食たべられたことがありません。それで、つい、手づかみで食たべては、おかあさんにしかられる

のですが、お婆さんのまえでは、まさか、手づかみで食^たべるわけにはいきません。

タカシが、いっしょうけんめい、フォークをつかつて口にはこぼうとしていると、お婆さんはわらいながら、

「食^たべにくかったら、手でつまんでもいいわよ。」

と、いつてくれました。それで、タカシは、手づかみで食^たべることにしました。お婆さんは、とてもじょうずにフォークをつかつて、アップル・パイを切^きると、口にはこんでいました。

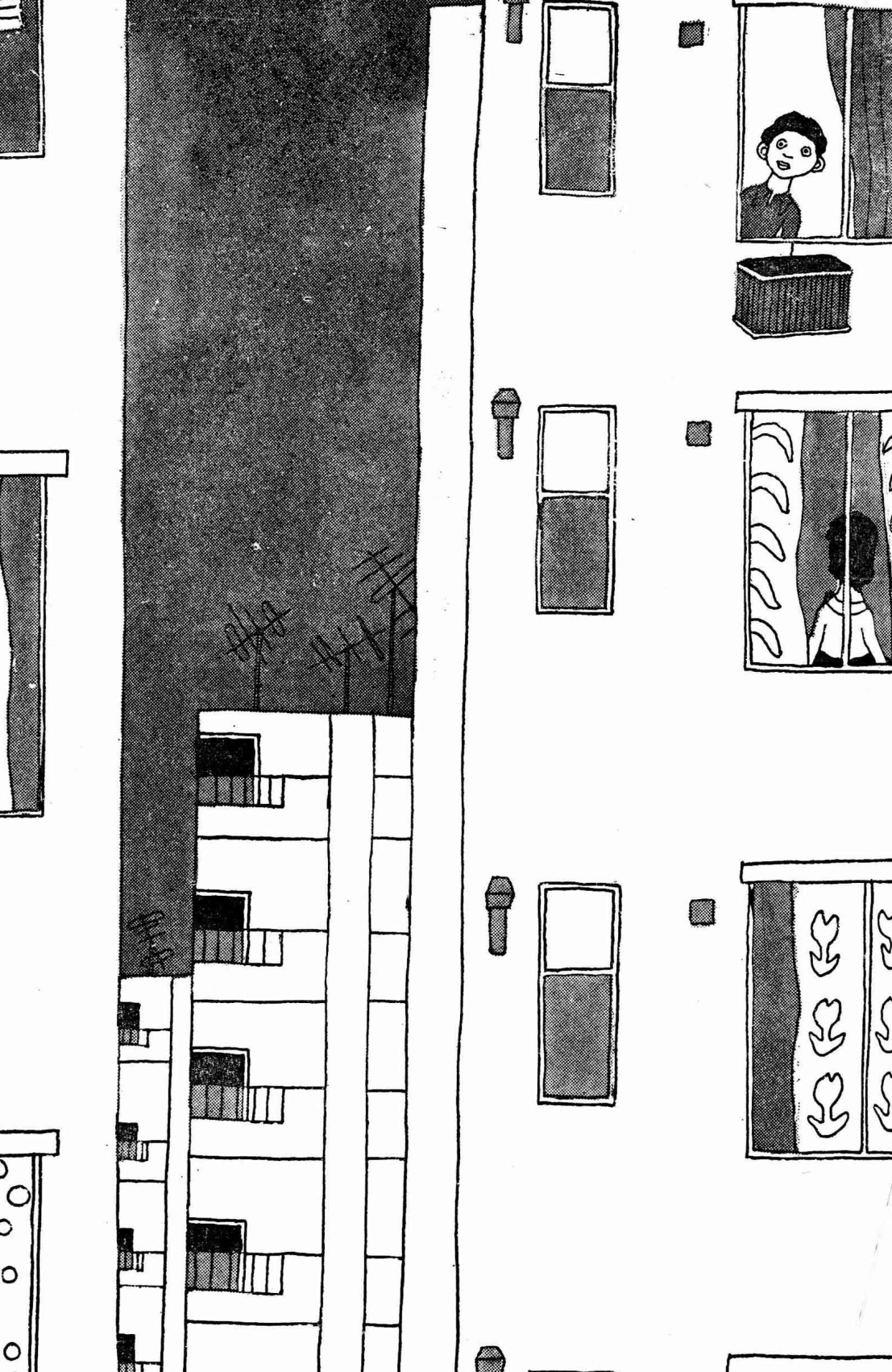
「タカシ君は、三年生ね。三年生になると、勉強^{べんきょう}もむずかしいでしょう?」

タカシは、ちょっとかんがえてから、いいました。

「うん、……でも、それほどじゃないよ。」

そのとき、まどの下にさがっているかごの中で、カナリヤがなきました。とても、きれいななき声^{こゑ}でした。

タカシは、いすから立ちあがると、まどのところまでいって、カナリヤをながめました。



まどのむこうには、初夏しよかの空が青くすんで、かがやいていました。

それを見ると、タカシは、なんだか、きゆうに、おしりのあたりがむずむずしてきました。

「あそびにいきたいの？」

と、おばさんがいいました。

「いいわよ、あそびにいつでも。でも、なるべく、団地だんちの中であそんでちょうだいね。外はあぶないから。」

タカシは、うなずいて、つくえの上のランドセルを手にとろうとしました。

「かまわないわよ、そこにおいとしても。おかあさんがおかえりになったら、おわたししておくから。」

「じゃあ、いってきます。」

タカシは、元気よく、いきました。それから、ドアをあけると、のぼりのときより、もっといきおいよく、階段かいだんをかけおりていきました。